

敦煌の西藏文禪宗文献の研究 (4)

沖 本 克 己

I. Pelliot 635 が Pelliot 3559 に含まれる『大乘安心入道法』に一致することが判明したので報告する。

P. 635 は貝葉 1 枚の表裏に計 10 行にわたって記された藏文断簡であり、従来の研究では 2 部分に分たれ、後半部の『降魔藏安心法』のみが禪文献であるとされていたが¹⁾、漢文写本との対応から、表裏が逆になり、文献整理の段階にさかのぼって訂正を要することが明らかとなった。以下に Text と試訳を掲げ、いくつかの問題を提起しておく。

II. 藏漢テキストと藏文試訳²⁾

(3b1) kyang gnod par myi gzung ngo// ji lta she na phyi rol kyi rgyen thams⁽¹⁾
cad ni// so so nas nges par chad paḥi ḥdu śés dang// yin ba dang ma yin ba
dang// skye ba dang ḥgag pa myed de/ kun kyang sems kyi dbang kysis byaso//⁽²⁾
(1/2) ga la te sems myed par nus na// chos la bsgribs śing thogs pa myed
do// bcings pa glol pa myed de// rang bshin kysis bcings pa myed pas// rnam
par grol pa she byaḥo// bcings pa dang glal ba thogs pa (2/3) myed pas// lam
shes byaḥo// yang yin pa dang ma yin par blta ba ni// bdagi⁽³⁾ myi bden paḥi
ḥdu śés las ḥbyung ste// ga la te myi bden paḥi sems shi na// yin pa dang
ma yin pa shes sus dphyas⁽⁴⁾ gdags (3/4) ga la te gang zas gzung ba dang//
ḥjin pa gnyis myed na// mtsan nyid rtag du shiḥo// chos thams cad mnyam paḥi
phyir// som nyi thams cad kyang de bshin nyid de// tshul bshin yang dag par
bltas na// lam ma yin (4/5) paḥi chos gang yang myed do// chos ḥdi ni mdoḥ⁽⁵⁾
gsang ba ste// yid thu ngu rnam kysis dpag nus pa ma yin no// rnal ḥbyuor⁽⁶⁾
ba rnam par glol ḥdod na// skad cig ltos śig// bden pa ce su ḥjin na (3a)
yi geḥi ḥbru ma len paḥi phyir yang sems brtul la rgyun ma chad par
byaḥo// ḥdran⁽⁷⁾ thor gyi phyir sems btang te// ḥphro ba dang/ gyeng bar myi
byaḥo// lam chen po ni khyad du ḥdor du myi rung ste// drang por myi smra
bar sems kyi (1/2).....yod par bya ste// gzeng bstod la lus dang sems gso

shing brtag ste// chos kyi sku bsgru bo// stong ba gsum gyis bdag pa dul te//
 ses rab kyis tshor bar byaḥo// myi ḥdod paḥi gang zag ni// lung nod myi nus
 kyi// bsod nams che paḥi (2/3) gang zag gis sgom nus par ḥgyur ro// nang
 du bltas kyang myi mthong// bzlag ste mnyam kyang bdagis myi thos// de bas
 na chos thams cad ḥgog par ses ba dang// te je ḥjin ma yin te// ḥbyung ḥjig
 myed (3/4) paḥi sems ni// shi ba chen poḥi chos te nge ḥjin ces byaḥo// bsam
 baḥi rnams myi ḥbyung pa ni// bsam kyis myi khyab paḥi ti nge ḥjin shes
 byaḥo// rgyen las gyurd pa ni// chos nyid gyi te nge ḥjin ces byaḥo// (4/5)
 bod skad du/ bsam gtan kyi mkhan po/ bdud ḥdul kyi snying poḥi sems// bde
 bar gshag paḥi chos so// lus dang sems phyogs su snyoms pas// gom pa ḥdor
 pa dang// ḥdegs pa (尾欠)

- (1) rkyen. (2) 漢本なし. (3) byas so. (4) pa+(dang). (5) grol. (6)
 grol. (7) bdag gi. (8) ḥphyas. (9) ḥdzin. (10) mtshan. (11) thung ngu.
 (12) ḥbyor. (13) grol. (14) ces su. (15) ḥdzing. (16) ḥdren(?) (17) brgrub.
 (18) bdag gis. (19) ting mge ḥdzing このあたり、脱落多し. (20) ting nge ḥdzin.
 (21) ting nge ḥdzin. (22) rkyen. (23) (ma)+rgyur. (24) ting nge ḥdzin.

稠禪師意 問大乘安心入道之法云何。

答曰、……(中略)莫嫌為妨、何以然者、一切外緣、各無定相、是非生滅、一由
 自心。若能無心、於法即無障礙、無縛無解、自体無縛、名為解脫無礙、稱之為道。
 又復是非之現、出自妄想、若自心不心、誰嫌是非。若能所俱亡、則諸相恒寂、以
 諸法等故、万惑皆如、如理真照、無法非道、此法秘要、非近情所惻。行者若欲開
 讀、鑿看實意、莫取文字、還自躡心、無令有間、不得調戲散心放逸。大道法不可
 輕示、正可默心自知、以養神志、溫道育德、資成法身。三空自調、以充惠命。非
 是不肖之人而能堪受要。福重人乃能修耳。內視不已見、返聽不我聞、乃知一切諸
 法滅、非智緣滅。若能行此觀者、体同虚空、名無辺三昧。無心入、名大寂三昧。
 諸量不起、是不思議三昧。不從緣變、名法住三昧。

[試訳]……も損うことを得ないのである。如何と云えば、外界の一切の縁はそれ
 ぞれ必ず断ち切られる想であり、是非と生滅がなく、それら全て心によって作
 られるのである。もし無心たり得るならば、法を覆い障げるものはないのである。
 束縛と解脱はない、というのも本来束縛はないから解脱といわれるのである。束
 縛と解脱は障げないから道といわれるのである。また是非を見ることは自らの妄

想から生じるのであって、もし妄心が静まれば是や非と誰が非難するのか。もし少しも能取所取の二つがなければ、相は常に寂靜である。一切法は平等である故に、一切心も如であって、如埋に正しく観察すれば、道でない法は何もないのである。この法は秘密の教えであり、ちっぽけな心でははかり得ないのである。瑜伽行者が解脱をのぞむなら一瞬に見よ。眞実といわれるものをつかまえたなら、(3a1) 文字の小片を取らぬ故に、また心を調御しつつ間断なくせしめるのである。念が散じる故に心を捨てて、散乱と拡散をさせぬのである。大道はとりわけ捨て去るべきでなく、正しく黙して心の……をあらしめて、称讃しつつ身心を養い思慮して法身を成就するのである。三空によって我を調御し、知恵によって覚するのである。のぞまぬ者は教授すること不可能であって、大福德の人は修習可能となるのである。内を見ても見えず、逆に、聞いても自ら聞こえない。それ故に一切法滅尽と知ることと〔以下脱落有、意味不通。漢文参照のこと〕、三昧ではなく、生滅なき心は大寂靜三昧といわれるのである。思慮の類が生じないのは、不思議三昧といわれるのである。縁から変じ(ない)ものは法性三昧といわれるのである。チベット語で、降魔蔵禅師安心法。身心を一向平等にして、歩調を取ったり、起ち上ること……。

III. 以上の如く、漢文写本の下線部「すみやかに実意を看て、文字を取る莫れ」は P. 635 を表裏逆に接続すれば、そのまま対応する。P. 635 の最末尾、『降魔蔵禅師安心法』以下が、漢文『安心入道法』の「起作恒寂、種々動靜音声刺」と対応すると考えるならば裏面に続き得るが、そうすると一枚の貝葉が表裏連続することとなり、理に合わない。それ故、従来裏面と考えられていたものが表面で、丁付けの「3」あるいは「kha 43」は裏面に付されたもので、貝葉のほぼ全体が『安心入道法』の蔵訳であると考えるのが妥当である。

それでは『降魔蔵安心法』の具題は上下いずれを指すのか。蔵文文献では具題が文頭に来るか文末に来るかは一定せず、例えば M. Lalou はこれを尾題と見ており³⁾、それに従うならば、『安心入道法』は降魔蔵に帰される。

漢文写本冒頭の「稠禅師意」は不可解であるが⁴⁾、P. 635 は「降魔蔵禅師意、安立法」とも読むことが出来、ある種の共通点が見出せる。『宗鏡録』⁵⁾の引用に従えば『安心入道法』が稠禅師に帰されるのは確実であり、同じく稠禅師の『大乘心行論』とも思想・用語が共通し、そのことが傍証される⁶⁾。従って、ここでは稠禅師=降魔蔵の図式が浮びあがる。

稠禅师は『統高僧伝』によれば神異僧としても卓越しており⁷⁾、こうした別称があっても奇異ではないが、それを証する資料は何もない。一方、『降魔藏禅师安心法』を下に続く文の表題と見做せば、それはわずかに半行足らずしか知り得ない。降魔藏は『宋高僧伝』『景德伝灯録』⁸⁾に伝がある他、P. 116 にその語が写されており、次の如くである。

何も念じないのが仏を念ずることであると云われる。常に仏を念じつつ想を生じないならばまっすぐに無相であり、しかも平等一枚であって無想である。この境地に入るなら憶念は静まるのである。また堅固である必要はなく、ありのままに見て平等なら、如来の清浄な法身そのものである。

『安心入道法』に見られる思想との同異はにわかには決し難く、ここでは資料の提出にとどめて識者の教示をまちたいと思う。

以上の他に、P. 635 から窺えることとしては、漢文『安心入道法』はその構成が雑然とし、更に後に続くが、全体は統一的に記述されたものではなく、上に引いた部分までが別行している場合がある、ということ、また、藏訳は存在しても、これがチベット本土に行なわれた形跡は現在迄の所、見られぬこと、チベット仏教を考える上で問題となる“*rnal ḥbyor ba*”(瑜伽行者)はここでは単に「行者」の訳にすぎないこと、等である。

1) 木村隆徳「敦煌チベット語禅文献目録初稿」文化交流研究施設研究紀要第4号、東京、1980、pp. 107-8.

2) 藏文テキストは写本通り印字し、注によって訂正を加えた。漢文テキストは、すでに公表されているが一部訂正を加えた。柳田聖山「伝法宝紀とその作者」禅学研究53号、京都1963. 57頁参照。

3) M. Lalou, *Inventaire des Manuscrits tibétains de Touen-houang*, Paris, 1939, p. 143.

4) 柳田聖山、前掲書55頁。

5) 『宗鏡録』大正48巻941a-b。

6) 例えば『大乘心行論』(P. 3559)には以下の語がある。

心外無法……心外無好悪、無是非。

心既無時、阿誰造善悪、若無善悪、即是菩提。無想意、諸法無淨穢、明闇在心。心迷諸法、諸法縛、然諸法体、無縛無解。

不聞善事意不起、目属悪法心不従、是非得失忤於己。但禱惠眼自形相。

7) 『統高僧伝』大正50巻553b-555b。

8) 『宋高僧伝』大正50巻760a、『景德伝灯録』大正51巻232b。

* 従来使用していた「敦煌出土」云々の「出土」は適切な術語ではないので表題を変更した。
(花園大学助教授)